

ほのぼの

第47号

平成29年

11月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



「うれしいような うれしくないような」

住職

以前、姉妹が「百歳 百歳」ということでテレビをにぎわしていましたことを覚えておられるでしょうか。その頃は元気はつらつの百歳は稀でした。今は百歳以上の人が六万人を越え、九十歳代は二百万人日本にはいるそうです。当寺の檀家さんでも百歳代の人が二人おられます。二人とも女性です。足腰はかなり弱っておりませんが、家の中では自分の力で動いています。立派なものです。百歳以上の人が珍しくない時代になりました。人生は「五十年」と言われてきました。それが医学などの驚異的な進歩によって、「八十年」になり、今では「人生百年」の時代を日本は向かえようとしています。

長寿は古来より人間が求め続けた永遠のテーマです。しかし、「心」ではそういう気持ちを持っていても、「身」の方はそれについていくのが大変です。老いてきますとまず足腰が弱り、

動きが鈍くなります。頭脳の働きも衰えて物忘れも日常化してきます。こんなはずではなかったのにと  
思いながらの日々です。他人のことではありません。  
わが身のことです。

以前お参りに行った時のことです。ピンポンを押しても返事がない。なかなかドアが開かない。留守  
と思い帰りかけると、ドアが開き出てこられました。  
ドアホンが鳴っても体がすぐに動かないとのこと。  
「生きているだけでも大変なんですよ、御院さんにはまだわからないでしょうが」と老いの実態を切実に話された老婦人の言葉がよみがえります。思いもしない長寿の時代になりますと社会状況も変わりました。老人介護の施設が増えました。デイサービス  
の車も町中を頻繁に行き来しています。健康食品  
や若返り薬の広告が町にあふれ、健康保持や体力増進のためのジム通いの人なども随分増えています。  
私たちの関心事はなによりも「生きること」です。  
生きていかねばならない。そのためには食べねばならない。食べるにはお金がいる。だから我を忘れて働く。気が付いたら知らぬ間に老いたわが身がある。  
そこで老いを少しでも遅れさせようと思いブレーキ

をかけようとする。最新の医療で病いの回復をはかる。しかし、このような人間の努力も「死」から逃れることはできません。食べても食べなくても死んでゆかねばならない現実を認めざるをえません。動物の一生は「食べて・寝て・次代に続く子供を育てて」終わりです。私たちの一生が動物としてだけで終わるなら「人生百歳の時代」はうれしいのやらしいのやわかりません。あそこが悪いここが痛い  
と、思うように動けないわが身との付き合いが長くなったというだけになりかねません。

「あなたはこの世の命が終わったら、どこへ行くのですか」と聞かれたら、「親のところに戻ります。お浄土に生まれていきます」と私は答えます。

「あなたは生きて、この世に何を残したいですか」と尋ねられたら、「自分の生き様です。如来さまに  
いだかれた生き様です。」と言います。

「痛い、つらい、まわりに迷惑をかける、こんなことなら死んだ方がましだ。何故つらい思いをしてまで生きていかねばならないのか」との思いが心の中をよぎるのが人間です。けれども、これだけで私たちを終わらさないのが阿弥陀さまの御心です。

## 神戸市民ラジオ体操の会「五千回」

谷藤清子さん表彰おめでとうございます

◎ラジオ体操に参加されるようになったきっかけは何ですか？

《谷藤》 私は四十五、六才の頃、ストレスから喘息になり、入院ばかりしていました。なかなか治らないので、良い



お医者さんを探し、全国から重病の患者が来るという金沢の病院に行きました。そこでの医療はとてつらいものでした。例えば、身体を鍛えるために、朝早くから寒い雪の中を歩かされたのです。あまりのつらさで倒れ、おんぶしてつれて帰ってもらったこともあります。その歩くことがよかったです。ようか。六か月後、退院するとき先生から「谷藤さん、散歩が大事。帰ってから山登りとかして歩きなさい。」と歩くことを勧められました。

帰ってから山歩きをしていましたが、舞子の佐野病院に二年半入院、その後も近くの二つの病院で入退院を繰り返して、ようやく治ったのです。そん

な時、友達がラジオ体操に誘ってくれました。毎朝五時半に起き、雨の日も冬のまだ暗く寒い日も毎日休まず、妙法寺川公園まで歩き、体操をしています。

◎過去に喘息との大変な戦いがあったのですね。治ってよかったですね。五千回もの長い期間ラジオ体操を続けることが出来たのは、どうしてだと思いますか？

《谷藤》 それは健康維持のため。そして、終わったあと、友達と喫茶店へモーニングを食べに行く楽しみがあるからです。

◎信行寺の行事にも熱心に参加されていますが、いつ頃からのご縁ですか？



《谷藤》 昭和三十三年からです。それからずっとお参りさせてもらっています。

「つらくて仕方なかった息の苦しさや戦いながらも寿命があり、生きる人生は苦である。でも、今まで乗り越えて来られたのも阿弥陀様のお蔭。お浄土に生まれさせて頂けるといい一日一日を感謝しています。」

谷藤 清子

## 第三十五回夏季特別法座

妙好人・了妙

副住職

八月十九日（土）夏季特別法座を行いました。今回で三十五回目を迎えます。今回の法題は、「お念仏の舟に乗せられて」でした。當麻曼陀羅（奈良、當麻寺の本尊）のことを交えて法話がありました。昼食後、みやび会のコーラス、ヨガ体操を行いました。また、副住職による作法や仏教に関する疑問などの話がありました。

来年も多くの方々の参加をお待ちしております。



秋の彼岸法要で、高田先生が了妙さんという妙好人のことを少し話してくださいました。心に残るエピソードだったので、あとで自分でも調べてみました。

蓮如上人が奈良の吉野に行く途中、往来されていた街道に八木というところがあります。今の近鉄大和八木駅のあたりです。そこに「よつ女」と呼ばれる女性が居ました。彼女は若くして夫、息子、嫁に次々と先立たれるという不遇の人生で、晩年は一人糸を紡いで暮らしていたそうです。

ある夏の暑い日に、彼女がいつものように糸を紡いでいると、蓮如上人が一杯の飲み水を所望されたそうです。そのご縁で、蓮如上人が吉野に赴くときには立ち寄って、仏法をお説きになるようになりました。

念仏を称えつつ、糸車を回す生活を続けていくな

かで、蓮如上人が立ち寄られる度にお念仏のいわれを聴聞されたのでしょうか。そのうち蓮如上人から「了妙」という法名をいただきました。蓮如上人は草鞋が足にくいこむほど歩かれたと聞きますが、行く先々の道中でのご縁も有難い仏縁となったのですね。

いつものように立ち寄られた蓮如上人が了妙にたずねます。

「了妙や、念仏称えていますか？」

「はい、毎日こうやって糸を繰りながらお念仏称えさせてもらってます。」

「了妙や、糸を繰りながら、お念仏称えるのですか？ 毎日お念仏称えて、糸を繰っているのではないですか？」

それを聞いた、了妙はハタと気づいたのです。

「そうでしたそうでした。日々お念仏のなかで、こうやって糸を繰らせていただいております。なんまんだぶ、なんまんだぶ」

ちよつと聞いただけでは、糸繰と念仏の順番が違うだけのようですが、「糸を繰りながら、念仏」と

なると、その念仏は、日々の生業の付け足しのように聞こえます。日常生活の付け足しとして念仏があるのではなく、お念仏が中心の日暮がまことの念仏者のあり方なのでしょう。蓮如上人は他力の信心をいただきましたい、とすべての人に勧められました。阿弥陀さまが「必ずたすける、私にまかせなさい」というのがお念仏のころ。それをそのまま「ありがとうございます」といただくのが他力の信心です。お念仏のなかで、糸繰をさせていただく。それは「私が全部引き受ける、心配ない」という阿弥陀さまの大悲が「なんまんだぶ」の声となって、私と共に人生を歩んでくださる姿だと思っています。

他力の信心に目覚めた了妙さんのことが、「蓮如上人御一代記」には次のようにあります。

「蓮如上人仰せられ候ふ。堺の日向屋は三十万貫を持ちたれども、死にたるが仏には成り候ふまじ。大和の了妙は惟一つをも着かね候へども、このたび仏に成るべきよと、仰せられ候ふよしに候ふ」と。



## 花の？女子高校生になりました！

米田 光輪

楽しかった中学校。

大泣きした卒業式。あれから半年経ちまし



た。私は、幼稚園の先生になりたい、子供達にいろんなことを教えられるようになっていたいと考えて、専門校の幼児教育コースに進学しました。他の学校と違うところは、宗教の授業があつて、自然と身に付き、仏教讃歌の教えがあることです。心の支えとなり、人と人の繋がり大切さを深く感じています。

部活動は演劇部に入りました。人前に立つことで自分を変えてみたかったこと、仲間と楽しく活動したいと思ったからです。実際は、なかなか意見がまとまらなくて辛いな、と感じることも多いです。難しいです。とにかく、仲間と共に笑顔のたえない三年間にしたいです。将来も子供達といつも笑顔がたえないでいられる先生になること、これが夢です。仏教を基本に成長できる環境に感謝しています。

## 日頃の疑問を考えよう

Q

長男の家ではないので、仏壇がありません。「亡くなった人もいないのに仏壇を迎えたとその家に死人が出る」とも言いますし。本当ですか？

A

そのように考えるのは、仏壇は死者の入る所という誤った解釈に立っているからではないでしょうか。仏壇は、死者や先祖の入る所ではなく、ご本尊・阿弥陀如来の館です。仏壇を家庭の中心と考え、手の合わせやすい場所に安置するとよいでしょう。仏壇とは、門徒としての日常生活の心のよりどころです。

Q

朝夕一日の無事を感謝して手を合わせています。このようなお勤めの仕方でのよいのでしょうか？



A

真宗のお勤めは、死者に回向したり、祈禱や精神修養のためにしたりするものではありません。お釈迦様の説法や宗祖のお念仏のあじわいを繰り返し拝読することによって、お念仏の信心を喜ばせていただく報謝です。亡き人やご先祖は、その仏様のすばらしいお念仏とそのことを喜ぶことのできる人間としての命を伝えてくださった方として偲び、感謝するのです。お忙しいとは思いますが、朝夕二回、お経をあげられるといいですね。線香は立てずに火をつけて寝かせるのが作法です。

A Q

お供えや仏具の飾り方を教えてください。

仏壇を厳かに飾ることを「莊嚴」といいます。「真つ先にお仏飯を」といわれるように、朝、仏壇を莊嚴するためにお供えをします。しかし、ご霊膳といわれるような仏様や亡き人に差し向けるものではないかもしれません。また、真宗では、お水を供えないのが昔からのしきたりです。仏具は、仏壇によって異なることがあります。三具足もしくは五具足をバランスよく飾りたいものです。図を参照して、並べ方

を確認してみましょう。蠟燭立、香炉に足がある場合は、三本の足のうち一本が正面にくるように置きます。

三具足

写真1



五具足

写真2



引越すことになったら、仏壇はどうすればよいでしょうか？

仏壇を移動させなければならないときは、移動させる前と後に遷仏法要（いわゆるお性根抜き・入れの法要）をしないとよいでしょう。

お気軽に質問してくださいね。お待ちしております。



## 信行寺行事予定とご案内

### ◇報恩講法要

十二月十六日（土）法話 天岸 浄円 先生  
十二月十七日（日）法話 住職

二日間とも午後二時より四時までです。  
ご都合に合わせて、一日でもお参り下さい。  
十六日にはお斎があります。

### ◇新春初法座

平成三十年 一月五日（金）午後一時より

お正月をお寺で楽しくお迎えしましょう。  
お勤め、法話の後、皆さんと楽しく語ら  
いながら、御馳走（お世話の方々手作り  
の料理を持ち寄ってくださいます）をいた  
できます。

### 編集後記

前号（四十六号）でお願いしましたアンケートのご協力  
ありがとうございました。貴重なご意見、ご感想を多数  
寄せていただき編集者一同喜んでおります。今後の「ほ  
のぼ」作成の参考にさせていただきます。

ご住職、副住職の内容に興味を持たれ、楽しみにされ  
ている方が多くありました。今後とも面白いお話を書いて  
頂きたいと思っております。

また「日頃の疑問を考えよう」コーナーも続行いたしま  
すので仏事に関することを一緒に学んでいきましょう。  
今号に谷藤清子さんのお話を記載しておりますが、  
これは谷藤さんのアンケートの回答を踏まえて、インタビ  
ューをさせていただきました。この様に皆さんの体験を記  
載したいと思っておりますので、沢山のお話をお聞かせ  
下さい。

表紙の写真は宇治の平等院鳳凰堂がライトアップさ  
れて、窓から仏様のお顔が見えたのを写しました。